

第32回中世哲学会大会シンポジウム報告

論題：Imago Dei —アウグスティヌス 『三位一体論』をめぐる—

司会 東京都立大学 加藤 信朗
 提題：精神の自覚の三一的構造
 関西学院大学 片柳 栄一
 提題：自己認識の場をめぐる
 九州大学 谷 隆一郎
 (於 京都大学 1983. 11. 13)

司 会

加 藤 信 朗

本年度、第32回中世哲学会大会のシンポジウムは前々年、前年と三年間にわたって行なわれたアウグスティヌスをめぐるシンポジウムの第三年目にあたり、アウグスティヌス晩年の大作『三位一体論』を取上げ、表記のテーマで行なわれた。アウグスティヌスの神思索の最高峯をなすこの作品に向って、西欧諸国ではこれまで多くのアプローチが試みられているが、わが国においては、今回のようにこれが綜括的な形で取上げられ、提題者と会員諸氏の共同の討論の場にもたらされたのはおそらくはじめてのことであろう。提題は新進気鋭の二会員、片柳栄一、谷隆一郎の両氏により行なわれ、その要旨は以下に掲載されるとおりである。片柳氏は、いわば、人間実存の根源所与としての愛のうちに構造的に埋めこまれた神の似姿としての三一性構造を求め、ここから、神そのものの三一性を予感したのに対して、谷氏

は人間精神に秘められたこの三一性の似姿を動態論的に神の救済論的エコノミーに定位されるべきものとした。すなわち、それは創造、墮罪、救済という、万有がそこに根拠づけられてある基本階程を介して、いわば、神の生命の発現の救済論的構造に位置づけらるべきものとされたのである。司会者には、両提題者のアプローチは『三位一体論』の Imago 論における第Ⅶ—Ⅹ巻の（人間の精神が神の似姿としてもつ）三一性の思弁の次元と、第Ⅺ—ⅩⅣ巻に新たに拓かれる三一性思弁の次元に、それぞれ、おおまかに言って、定位されているように思われた。そこで、両提題を通じてわれわれに問われてくるのは、『三位一体論』全巻の構成の問題、とりわけ、第Ⅶ—Ⅹ巻、第Ⅺ—ⅩⅣ巻を相互に、また、全体の中でどのように位置づけるかの問題、さらにはまた、そこから必然に帰結する問題として、神そのものの三一性を問う最終巻、第ⅩⅦ巻の思弁が何であったかの問題であるように思われた。こうして、われわれはこの、再三の挫折を経験しながらも、ねばり強く考え抜かれたアウグスティヌスの三一性思弁の最内奥に参入する入口にまで達していたことになる。これは欧米の先進諸国のこれまでの研究によって必ずしもすでに明らかであるとは言いがたい一点である。席上の会員諸氏からの発言がすべて何らかの一事に収斂していったのは今回のシュムポジウム共同討論の水準と成果を証しするものと言えよう。まず、今道友信氏から、「人間が神の似姿である」という場合と「人間が神の似姿にしたがって作られた」という場合の違いがただされ、この点でのアウグスティヌスの思弁の位置づけが求められた。この問は「似姿」という神と人との関わりそのものを主題化し、神そのものにおける三一性へと人の目を向ける力をもつであろう。また、山田晶氏からは、アウグスティヌスの三一性の思弁は単に被造物のうちにおける三一性の似姿の跡づけに向けられていたのではなく、そこから発して、神そのものの三一性に向うものであったことが強調され、これを「心理学的（または、魂論的）三一論（die psychologische Trinitätslehre）」と特徴づけることの不適切さが指摘された。こうして、われわれは本シュムポジウムを通じて、本シュムポジウムがテーマとした「神の似姿 Imago Dei」の論を越えて神そのものにまで赴くべきことを教示されたことになる。だが、それはまたアウグスティヌスがこの作品を通して教えていたことでもあったのではなかろうか。

他に、稲垣良典氏、泉治典氏からも発言があった。それらは当日の時間の制約上

の不足をいくらか補って、それぞれ意見として以下に載せられている。

提題

精神の自覚の三一的構造

片 柳 栄 一

アウグスティヌスは *De trinitate* 第八巻以降において、これまでより内的な仕方
で神の三一性を理解しようとする。人間の精神の三一性のうちに *imago Dei* を認
め、これを通して神の三一性を垣間みようとする。しかしこのことは単に、不完全
な形象から、完全な形を類推するというにとどまらない。アウグスティヌスが人間
の精神を *imago Dei* と呼んだ時、そこにどのような深い意味がこめられていたか
を示す *De trinitate* の一つの箇所を示しておきたい。彼はその十四巻の後半で、使
徒行伝十七章の有名な言葉「我々は神のうちに生き、動き、存在している」を引用
して、我々が神のうちにある在り方は二つ考えられるという。一つは物体に従って
secundum corpus のものであり、我々がこの物的世界のうちにあるということが
すでに神のうちにあると考えられるという。しかしもう一つの仕方は、精神に従っ
て *secundum mentem* のものであり、より優れた、見えざる、叡知的な仕方
で、我々は神のうちに生き、動き、存在しているという。アウグスティヌスによれば、全
ての事物、全ての被造物が、同じ仕方
で、神と共にあるのではないという。引用す
ると「人間が神に対して『私は常にあなたと共に在ります』と言うのと同じ仕方
で、全ての事物が神と共に在るのではない。また神御自身、我々が『主は我々と共
に在す』と言うのと同じ仕方
で、全てのものと共に在すのではない。それ故、その
方なしには在りえないその方と共におらない時の人間の悲惨は甚だしいものであ
る」(14・12・15)。

アウグスティヌスによれば、全ての事物は、神のうちに在る、或いは神と共に在
る。しかしその共にある在り方は同じではない。人間に特有の、他にまさった在り
方において神のうちに在り、神と共に在る在り方が、精神に従って *secundum men-*
tem のものであり、この人間独自の在り方を探ることが、アウグスティヌスにと
って *imago Dei* を探ることなのであり、それはまた、他の事物とは異った形の、